

## 2024年度日本数学会出版賞受賞者のことば

細木 周治 氏

この度、著作者あるいは編集著作者（書籍に著者として名前が明記される意味での）ではなく、編集のバックヤードで働いてきた私を「出版賞顕彰対象者」として選んでいただいたことに感謝と共に御礼申し上げます。出版の仕事にあこがれて入社したわけではありませんが、編集という仕事が意外と向いていたようで、退職するまでに多くの書籍を担当させていただきました。本紙面をお借りして、編者・著者の先生方に改めて御礼申し上げたいと思います。書籍それぞれに編集上の物語はありますが、ここでは個々の話ではなく、企画以外の“編集における $+\alpha$ の仕事”の話をさせていただきます。

入社したての頃は、校正（赤字で示された修正箇所の照合）をさせられます。この時に言わたされるルールは「赤字以外は勝手に直さないこと」です。“勝手に”の解釈はいろいろで、担当者の個性が発揮される“ $+\alpha$ の仕事”となります。私は「読者の代弁者としての提案」も作業に含まれるものと考え、特に初学者だと納得し難いかも感じないと感じた箇所に対する代案や、式の変形中に定理・公式などの使用がキーポイントになっていると思われる箇所にその旨を明記するか否かなどの検討をお願いするようにしてきました。当然、的を外したことも多くありましたが、誤解の発生ポイントの指摘には役立ったようで、著者から『何が判らないのかが判った』と感謝されたこともありました。

大学の低学年で学ぶ科目の場合、定理や公式はもちろんのこと、計算式の途中で裏ページに入ってしまうことは読者にとってストレスとなります。このような見だ目の不都合さの除去と図の改善も“ $+\alpha$ の仕事”となります。図の場合、方眼紙への鉛筆書きしか方法がなかった当時は、“伝えたいことが表現できない”もどかしさを著者も感じていたと思っています。編集者が図版製作者に対して作業指定をきちんと行うことで、重要な部分と補足的な部分とのメリハリある図が可能となり、見やすく工夫された図ができたのです。

ここまで、在職中における取り組み方の一部を紹介させていただきましたが、最後に、これから直面するであろう「大きな問題」について触れさせていただきます。それは「生成 AI」利用によって発生する問題点です。著作の立場からは有効なサポート（光の部分）が得られますが、編集の立場からすると著作権上の問題（影の部分）が心配になります。まだ大きな問題は発生していないように見えますが、現役の編集者たちはどのような答（解決法）を示してくれるのでしょうか。心配と共に期待をしたいと思います。

細木 周治  
株式会社裳華房  
元編集部長

『数の悪魔—算数・数学が楽しくなる 12 夜』エンツェンスベルガー 著  
(株式会社晶文社, 1998 年)

この度は『数の悪魔—算数・数学が楽しくなる 12 夜』に日本数学会出版賞をお贈りいただき、誠にありがとうございました。たいへん荣誉ある賞をいただき、これからも自信をもって読者のみなさまにお届けしていくことができそうです。

本書は、1997 年にドイツで刊行され、翌年に日本語版が弊社より刊行されました。26 年間にわたって増刷を重ね、累計 60 刷、53 万部を記録しております。

「算数・数学なんて大きらい！」そんな少年ロバートを主人公に、数学の世界を旅しながらその奥深さを知っていく物語です。舞台はロバートの夢の中、案内役はゆかいで怒りっぽくて小柄な老人「数の悪魔」。悪魔は毎晩ニヤニヤしながら現れては、言葉巧みにふしぎな問題を投げかけて、うんざりしているロバートさえも数学の話に引き込んでしまいます。数字の「1」ばかりが生えている森、フィボナッチ数のおりに増えていくウサギ、六角形のなかに六角形がおさまる美しい雪片……現実にはありえない景色が広がる世界で怒ったり笑ったり、ロバートは悪魔との対話をとおして、思考をめぐらせる楽しさを味わっていきます。

頭と心に苦手意識が根づいてしまった人にとって、算数数学は退屈に思えるだけでなく、自分の自尊心をおびやかす怖いものとしてイメージされることさえあります。ロバートと悪魔が驚いたり笑ったり口げんかしたりするやりとりを通して、数学の生き生きとした魅力が伝わってきます。

また、巻末には索引が付けられており、その説明書きには「悪魔」からのこんなメッセージも含まれています。「ところでこの表 [索引] には、この本には出てこなかった言葉もいくつか並んでいる。けれども、ぜんぜん気にする必要はない。つまりこの『数の悪魔』という本が、数学者やほかの大人に読まれることもあるのではないかと考えたからだ。その人たちにも、腹をかかえて笑ってもらいたいのである」。

さらに幅広い読者のみなさまに読んでいただけるよう、これからも尽力していく所存でございます。

葛生 知栄  
株式会社晶文社編集部